

## 特集 ジェンダーと政治

### 特集にあたって

国際ジェンダー学会誌第2号の特集のテーマは、「ジェンダーと政治」です。日本における様々なジェンダー研究の中で、研究成果の蓄積が最も少ないものの一つが政治学の領域ではないでしょうか。その理由として、これまで政治家として「政治」に参画する女性が少なかったこと、そしてまた「政治」を研究対象とする政治学を主たる研究領域とする女性研究者が少なかったことがあげられるでしょう。しかし一方で、多くの女性の直面してきた問題が私的領域の問題と見なされ、問題解決を求めた政策課題となりうる社会的政治的問題として認知されてこなかったということもあります。すなわち、女性が政治や政治学領域の研究に携わることが少なかったとともに、既存の「政治」枠組みから女性をとりまく問題が排除されてきたということもあるのです。

本特集は、このように研究成果の乏しい領域に注目し、少しでも貢献するべく組まれたもので、4人の研究者（うち非会員の方3人）に論文を依頼しました。

大海論文（「政治学とジェンダー」）は、政治学および政治学会に関してジェンダー概念を導入して分析することで、女性が除外されてきた経緯と要因を明らかにしようと試みた意欲的なものであり、上述した政治領域において研究成果が少ない理由とともに、既存の学問領域にジェンダーの視点を導入することの意義をうかがい知ることができます。

Swers 論文（“Whatever Happened to the Year of the Woman”）および武田論文（「イギリス政治システムのジェンダー化」）は、日本と比較して女性の政治進出が進み、またジェンダーと政治の研究においても多くの成果が報告されているアメリカ、イギリスの今日的状況を分析したもので、今

後、日本の「ジェンダーと政治」研究を進める上で大いに参考になるものと思われます。ただSwers論文に関しては、アメリカにおける政治の実情と「ジェンダーと政治」研究に馴染みのない方々にも是非目を通していただきたいという編集委員会の思いから、アメリカの「ジェンダーと政治」研究に精通されている相内真子さんに解説をお願いしました。

こうした中でちょっと異色なのがLe Blanc論文（“Why Women Are Representing Men in a Japanese Town Assembly”）です。日本のある町における事例をエスノメソドロロジーの手法を用いて詳細に分析したものであり、非エリートの男性を「代表」あるいは「代理」する女性に焦点が当てられています。男性も多様であり、「男性＝権力保持者」という単純な見方に警鐘を鳴らすものです。まさに「女性と政治」ではなく「ジェンダーと政治」という特集の意義を具現している論文と言えます。

いずれの論文も、これまでの日本の学会誌などでは報告されてこなかった内容であり、本誌に掲載することの意義が強く感じられるものです。特集を組むにあたって全面的にご尽力くださいました大海篤子さん、論文執筆をご快諾いただきました執筆者の方々、そしてご協力いただきました読者の方々に深く感謝を申し上げます。

国際ジェンダー学会誌編集委員会

特集担当 編集委員 大 山 七 穂